

配慮表現としての「とか」について

The Study of Expressions of Consideration ‘Toka’

山下 悠貴乃
YAMASHITA Yukino

筑波大学地域研究 第38号 別刷

平成29年 3 月

筑波大学人文社会科学研究科
国際地域研究専攻

配慮表現としての「とか」について

The Study of Expressions of Consideration ‘Toka’

山下 悠貴乃
YAMASHITA Yukino

Abstract

‘Toka’ is a method originally used to show examples in the form ‘～toka～toka’ to connect nouns and predicates in parallel. However, ‘toka’ is used in a different way to express one element showing either ambiguity or emphasis. Previous research on the use of ‘toka’ in interpersonal communications considering in the ambiguous way have been conducted but there have not been adequate research regarding its use as an emphasis method in interpersonal communications. This research, as a research in expressions of consideration aims to study how has the word ‘toka’ come to acquire this method of usage in interpersonal communications.

We used corpora of materials we collected and extracted 8 examples on the usage of “toka” and its functions in interpersonal communications in regard to both the speaker and the listener. After classifying the usage of ‘toka’, we analyzed its functions in interpersonal communications based on the origins of the expression of consideration.

The result of the analysis has allowed us to understand the characteristics on how the mechanisms of ‘toka’ work in interpersonal communications. As for the ambiguity method, this method occurs in the volition of the listener and it is used as a word to have the listener carry out a certain action, so that it works as an expression method which fulfills the fact of ‘say something to place the burden on the listener’ which is the origin of expression of consideration. In contrast, the emphasis method is rather dependent on the context. It is used as a verbal behavior for some kind of evaluation/ Moreover, it works as an expression of consideration.

Key words : Ambiguity Usage, Emphasis Usage, Expressions of Consideration, Politeness, Evaluation

キーワード：ばかし用法、強調用法、配慮表現、ポライトネス、評価

1. 研究背景

「とか」は本来、「～とか～とか」のように名詞や述語を形式的に並列的に結合する形式で候補例を挙げるといふ例示の一種の用法で使われる。しかし、その用法では使われず、「～とか」

のように一語、一語句などの一要素のみを取り上げて用いる形式で、ばかり用法（砂川 2000；劉 2011；洞澤・奥村 2015）や強調用法（天野 2001；洞澤・奥村 2015）で用いられることもある。ばかり用法としての「とか」が対人的コミュニケーションに配慮するために用いられることは先行研究でも述べられてきたが、なぜそのような機能を果たすのかが客観的に示されていないという問題がある。また、強調用法の「とか」についてはその用法が対人的コミュニケーションとどう関わるか、管見の限りまだほとんど分析されていない。

本研究では、上記の問題を解消するために「配慮表現」の観点から、何らかの対人的コミュニケーションを意図して用いられるばかり用法、強調用法の「とか」が、それぞれどのようにして対人的コミュニケーション機能を果たしているのか、そのメカニズムを考察することを目的とする。本研究の位置づけは、対人的コミュニケーションにおいて相手配慮が必要な発話行為に見られる「とか」について、これまで先行研究で述べられてきた「とか」の用法から文法的意味を解釈し、それを配慮表現の枠組みに照らし合わせ、その対人的コミュニケーション機能の観点から整理し直すものである。

II. 「とか」の用法

対人的コミュニケーション機能を意図して用いられるばかり用法や、強調用法の「とか」は、従来の一部例示（寺村 1991）や候補的並列（森山 1995）の用法から拡張したとされる。以下、まずは従来の用法を概観してから、本研究の分析対象であるばかり用法、強調用法を整理する。

1. 一部例示

これは、天野（2001）が「とか」の強調用法が従来の用法から拡張したと説明する際に、その従来の用法として取り上げている用法である。本研究でも同じく寺村（1991）の用法と例文を引用する。

「とか」は「ある集合について何かを言おうとして、そのメンバーのいくつかを例として取りあげるときに使われる。（寺村 1991：210）」。

- (1) 赤飯は、赤子の誕生とか、入学祝とか、結婚式とか、工事の完成とかのように、めでたいときに炊きます。（寺村 1991）
- (2) たまには町へ出るとか、郊外を散歩するとか、せめて庭の木でも世話をするととかしないと、身体に毒ですよ。（寺村 1991）

(1) では「めでたいとき」という集合を構成するメンバーの例として、「赤子の誕生」や「入学祝」「結婚式」「工事の完成」を列挙している。そして、ここに挙げられていることの他にもいろいろありうることを暗に示している。また、(2) は (1) のように「とか」で例示されるメンバーがどのような集合を構成するメンバーかは明記されていないが、メンバーから「身体を動かすこ

と」という集合について述べているであろうことが想起できる。集合のメンバーの一部を例示することにより、集合全体を推定させるものである。

2. 候補的並列

森山（1995）は、「とか」は形式的には、引用的な「と」と選択並列の「か」が組み合わさったものであり、単純な列挙を表すものではなく、何かの候補を挙げるという意味があるとし、寺村（1991）とは少し異なる解釈をしている。つまり、例示は例示でも「候補的な」例示であるとする。（3）のように引用部分に続く形で使用されることもあり、引用内容の「そんなことありませんよ」は適切な表現のために仮に挙げられた表現の一候補にすぎない。

（3） そんなことありませんよ、とかなんとか言って （森山 1995）

また、（4）（5）を挙げ、両者を比較することによって「とか」に選択的候補の意味が生じることを示している。

（4） 行く（と）か来る（と）かしなければならない。（森山 1995）

（5） 行ったり来たりしなければならない。（森山 1995）

「たり」と「とか」は同じく並立的結合を表すが、「とか」で反対語を挙げる（4）は「行く」と「来る」両方の動きをするのではなく、どちらかを選ぶという意味になる。それに対して「たり」で反対語を挙げる（5）は「行く」と「来る」両方の動きをするという意味になる。このような違いが生じるのは、「とか」に選択性があるからである。

続いて、これらの用法から拡張したと捉えられる、「ばかりし用法」と「強調用法」を見る。

3. ばかりし用法

ばかりし用法は、さまざまな先行研究で断定回避、暗示・曖昧などと表現されることもあるが、ここでは「ばかりし用法」の名称で統一することとする。並列されるものが実は存在しないのに「とか」が使用される、次のような例である。

（6） 私 便箋とかもってない（砂川 2000）

（7） （友達と夕食を食べに行くことになり、何が食べたいかを聞かれたときに）
ハンバーグとかがいいな。（洞澤・奥村 2015）

砂川（2000）では、「便箋」と並列されるものではなく、「とか」をつけることで、便箋そのものというよりも「便箋のように手紙を書き留めるたぐいのもの」すなわち、‘something like’のような広い意味あいが生じ、不確定、曖昧さを表す、としている。これは、ある集合の一部を例示

し、その集合を暗示するという一部例示の用法が拡張したものと言える。

また、洞澤・奥村（2015）では、「とか」を使うことで、ハンバーグ以外のメニューも考えていることを聞き手に想起させ、食べたいものを曖昧にして断定するのを避ける、としている。提案や勧誘、問い合わせをするときなどの場面で使われる例が多い、と述べている。

いずれも、ぼかし用法は、それによって表される曖昧性が人間関係の衝突を避け、円滑に会話を進めるために働いているとまとめているが、何をどのように「ぼかす」のか、その定義はあいまいである。より客観的に示す必要がある。そこで、本研究では、配慮表現の観点からぼかし用法で使われる「とか」を分析し、より具体的に「とか」が配慮表現として働くメカニズムを示したい。「配慮表現」とは、「対人的コミュニケーションにおいて、相手との人間関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられることが、一定程度以上に慣習化された言語表現（山岡 2015 : 318）」（山岡・牧原・小野 2010 : 143 に一部加筆し改訂した定義）であり、ポライトネス理論や配慮表現の原理に基づいているため、普遍的、客観的に現象の説明を行うことができる。

4. 強調用法

天野（2001）は、若者世代に多く用いられる「とか」の用法として、「卓立的提示」つまり、強調用法があるとしている。

（8）銅メダルとかとっちゃって。（天野 2001）

とったのは「銅メダル」だけであって、他の何も並立して列挙はできないし、実際に銅メダルを獲得しており、とったのが「銅メダル」であると確信が持てない状況でもない。そのことから、天野（2001）は、ここでの「とか」を従来の用法の「一部例示」や、断定するのを避ける「ぼかし用法」とは区別し、「銅メダル」を「強く示す言い方」とであるとしている。つまり、ここでの「とか」が話し手の評価を表す「など・なんか・なんて」に置き換えることが可能であることから分かるように、「こともあろうに銅メダルを」「他の何ものでもない銅メダルを」「何と銅メダルを」といった「銅メダルなどという大変価値の高いもの」という言語化されていない集合——〈きわ立った評価のもの〉——を暗示し、「銅メダル」を強調して示すとしている。つまり、これもぼかし用法と同様、ある集合の一部を例示し、その集合を暗示するという一部例示の用法が拡張していると言える。しかし、筆者は、ぼかし用法と強調用法が一部例示の用法から拡張しているという点で共通しているにも拘らず、強調用法が「とか」で取り上げる事柄を断定しないというぼかし用法とは正反対とも言える「強く示す言い方」とであるとする天野（2001）の解釈に疑問がある。（8）の「とか」がぼかし用法の「とか」と違うのは、その集合がただの集合ではなくて話者の評価態度が含まれているということである。ある集合と話者の評価態度が含まれている集合は対立するものではない。従って、「とか」によって示されることを「強く示す言い方」とする解釈は不適切で、「とか」によって示されることに対する「評価態度を示す言い方」と解釈すべきであろう。従って、本研究では、この解釈の立場で論を進めることとし、天野（2001）

の「強調用法」と区別するために「強調用法（評価態度を示す言い方）」と呼ぶこととする。

このような「とか」だが、先行研究において、この用法で使用することで聞き手にどのような伝達効果があるのかについては述べられてこなかった。(8)で用いられる「とか」を本研究の立場から解釈すると、今まで努力を重ねてやっとの思いで銅メダルをとったという状況であれば、「とか」によって示される「銅メダル」が「銅メダルなんてすごいもの」という評価になり、後悔、自責の念を表す「～てしまう（とっちゃって）」と一緒に使うことで、聞き手に自分の功績を自慢することなく、謙虚な態度を表すという対人的コミュニケーションに配慮した言語行動となる。

Ⅲ. 分析対象と分析の枠組み

本研究では、「とか」の持つ対人的コミュニケーション機能を明らかにするため、会話において、話者が聴者に対して何らかの対人的コミュニケーション機能を果たす必要がある発話行為に見られる「とか」を分析対象とする。「何らかの対人的コミュニケーション機能を果たす必要がある発話行為」の判断基準は、二人以上のやりとりにおいて、話者が聴者に行為や判断を求めたり、聴者やその所有物などに関することに言及する発話行為とする。他者の行為や判断、所有物などについて言及することは、他者の利益をおびやかしたり、負担をかけたり、情報のなわ張りを侵害することにつながったりする行為であり、人はそうなることをなるべく避けようとするものであるため、その発話行為で使用される「とか」を扱うことで「とか」の対人的コミュニケーション機能を観察できると考えた。

資料収集にあたっては、宇佐美（2011）「BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年版」を使用した。そこには母語話者同士、接触場面、親しい友人同士、初対面など、さまざまな条件が設定された会話が294会話収録されている。本研究では、その中の親しい間柄の母語話者同士の161会話を分析対象とし、分析対象の「とか」の用例を8例抽出した。

次に、分析の枠組について説明する。山岡（2015）は、「配慮表現」を「対人的コミュニケーションにおいて、相手との人間関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられることが、一定程度以上に慣習化された言語表現（山岡 2015：318）」（山岡・牧原・小野 2010：143の定義に一部加筆）と定義し、この配慮表現の観点から依頼や謝罪など、さまざまな言語行為における言語表現を分析した。その分析において、山岡・牧原・小野（2010）は、Leech（1983）のポライトネスの原理やBrown and Levinson（1987）のポライトネス理論を援用し、配慮表現の原理を立てた。ポライトネスの原理とポライトネス理論が、相手との人間関係を保ちながらやり取りを進めるための行動のルールを示すのに対し、配慮表現はそのための言語行動のルールを示す。山岡・牧原・小野（2010）は配慮表現の原理として以下を挙げ、気配りの原則と寛大性の原則は様々な言語行動に共通して述べられる原理であるが、是認の原則以下は言語行動によって原理が複雑に変わってくるため原理を立てていないと述べている。

表1 ポライトネスの原理と配慮表現の原理（山岡・牧原・小野 2010：68）

	ポライトネスの原理	配慮表現の原理
(A) 気配りの原則	(a) 他者の負担を最小限にせよ	(a) 他者の負担が大きいと述べよ
	(b) 他者の利益を最大限にせよ	(b) 他者の利益が小さいと述べよ
(B) 寛大性の原則	(a) 自己の利益を最小限にせよ	(a) 自己の利益が大きいと述べよ
	(b) 自己の負担を最大限にせよ	(b) 自己の負担が小さいと述べよ
(C) 是認の原則	(a) 他者への非難を最小限にせよ	
	(b) 他者への賞賛を最大限にせよ	
(D) 謙遜の原則	(a) 自己への賞賛を最小限にせよ	
	(b) 自己への非難を最大限にせよ	
(E) 一致の原則	(a) 自己と他者との意見相違を最小限にせよ	
	(b) 自己と他者との意見一致を最大限にせよ	
(F) 共感の原則	(a) 自己と他者との反感を最小限にせよ	
	(b) 自己と他者との共感を最大限にせよ	

また、姫野（2004）では、山岡・牧原・小野（2010）の利益と負担に関して述べる配慮表現の原理の他に、神尾（1990）の情報のなわ張り理論を援用し、配慮表現の原理を立てている。

表2 姫野（2004）の配慮表現の原理

聞き手の私的領域の侵犯を避ける。

原理1：話し手の決定権はなるべく表出しない。聞き手に決定権を持たせる。

原理2：話し手の意志をなるべくあらわにしない。聞き手の意志をあらわにさせない。

本研究では、これら配慮表現を分析の枠組として使用する。分析手順としては、分析対象として抽出した「とか」を含む用例を用法ごとに分け、その上で、「とか」の文法的意味から解釈できる文の意味を配慮表現の原理に照らし合わせる。

IV. 「とか」の配慮表現としての機能

1. ばかり用法で使用される「とか」を含む用例から

以下は、ばかり用法で使われている「とか」を含む用例である。(9)～(11)は依頼、(12)は説得、(13)は情報の補充を要求する発話、(14)は不満表明である。

(9) （お願いがあるという前置きをしてからの発話）

‘あの、「JOK07名」さんって、あの、言語調査とかって興味ありますか？

(BTSJコーパス会話59)

(10) 'なんか金曜日とかって空いてたりする？ (BTSJコーパス会話82)(11) 明日朝9時から3時間くらい実験とかできそう？ (BTSJコーパス会話90)

(9) は相手に言語調査に参加してほしいのであり、言語調査以外のことで他にも頼みたいことがあって、その一部として言語調査を例示しているのではない。また、言語調査とかなんとか、というように頼みたいのが言語調査だったかどうかははっきりしない、という意味でもない。相手に言語調査について質問する形をとっており、相手からの返答を引き出すための発話であり、話者の評価態度を示すものでもない。ここで提示したいのは言語調査であるというのは明白であるが、「とか」の一部例示やばかし用法の意味を利用することによって、はっきりと提示しない効果を産み出している。(10) (11) も同様である。このような効果は、配慮表現の原理の一つ、話し手の意志をなるべくあらわにしない、というのに沿っている。なぜこのように話し手の意志をあらわにしないようにするのかというと、依頼は自分の利益のために相手の領域に踏み込んで、相手に負担をかけようとする行為であり、相手の他者に邪魔されたくないという消極的フェイスを脅かすため、その消極的フェイス侵害を軽減する必要があるからである。また、(9)～(11) は、「とか」の配慮表現としての機能だけで対人的コミュニケーションへの配慮が形作られているわけではない。依頼表現として「～してください」などの行為要求の表現ではなく、相手の状況や意向を問う表現となっており、配慮表現の原理の一つ、聞き手に決定権を持たせる、というのに沿っている。このように、一つの発話の中で複数の配慮表現が機能している。

(12) '《少し間》そうか、うん、私としてはやっぱりずっと結構強くお願いしたから(うん)、もうちょっと頑張ってほしいなって(うん)、思うけど(うん)、えーなんか両方とかやっぱうんー<笑い>できない？ (BTSJコーパス会話281)

(12) は話者が店の人に友人をアルバイトとして雇ってもらえるように交渉したという経緯があるにも拘らず、その友人がアルバイトを辞めようと思っていることを打ち明けたのを聞いて、そのアルバイトを辞めずに続けて、新しいアルバイトと掛け持ちでやっていけないかと説得する発話である。ここで説得したい内容は今のアルバイトを辞めずに新しいアルバイトと掛け持ちしてほしいということである。他にも説得したいことがいくつかあって、その一部として示しているわけではない。また、相手の返答を引き出す形をとっており、「とか」で示されることに対する話者の評価態度を示しているものでもない。「とか」を使用することで、「とか」の一部例示や断定回避の意味を利用し、アルバイトを掛け持ちしてほしいということをはっきりと提示しない効果を産み出している。これも (9)～(11) と同様に、配慮表現の原理、話し手の意志をなるべくあらわにしない、というのに沿っている。説得は、話者の希望をかなえるために相手の領域に踏み込んで、相手の意志を変えさせようとする行為であり、相手の他者に邪魔されたくないという消極的フェイスを脅かすため、そういったフェイス侵害を避けるために「とか」が用いられてい

るのである。また、これも (9)～(11) と同様に、問いかける表現を用いて配慮表現の原理の一つ、聞き手に決定権を持たせる、を満たし、一つの発話の中で複数の配慮表現が機能している。

- (13) 'そうか、うんー、え、そのもう1個のバイトってちなみに何とか聞いていい？<笑い>。
(BTSJコーパス会話289)

(13) は話者が紹介したアルバイトを辞めて新しいアルバイトを始めたいと話す友人に、その新しいアルバイトが何かを尋ねる、情報の補充要求の発話である。ここで求める情報はもう一つのアルバイトが「何」かということであり、それ以外のことが知りたいわけではない。また、相手に返答を求める発話であるので、「とか」で示されることに対する話者の評価態度を示しているのでもない。会話において、会話の継続のために必要な情報が一方の参与者に不足している場合に必要情報を補充してくれるように要求するのは、対人関係に影響を及ぼす行為ではない。しかし、その情報が一方の参与者にとって尋ねにくく、もう一方の参与者にとって答えたくない、答えにくい場合はどうであろうか。「とか」を使用することで、聞きたいこと、つまり「何」という部分をはっきりと提示しないようにしている。これもまた、配慮表現の原理、話し手の意志をなるべくあらわにしない、というのに沿っている。

また、「ちなみに」「聞いてもいい？」の部分で、ついでに聞きたい、無理に答えなくてもいい、というニュアンスを出し、相手に答えるかどうかの判断をゆだね、「話し手の決定権はなるべく表出せず、聞き手に決定権を持たせる。(配慮表現の原理)」ということを行っている。このように、一つの発話の中で複数の配慮表現の原理が働いている。

- (14) 'じゃあ「JF23名」がちゃんと、その店長さんに話‘はんし’付けるんだったら、私に迷惑とかかかんないんだったら<別に>{<} 【】。(BTSJコーパス会話285)

(14) は話者が紹介したアルバイトを辞めたいという相談をしてきた友人に対して、友人に辞められたら自分のメンツが立たない、と不満を述べる場面での発話である。不満を述べるというのは、自分が不利益を受けていることを述べる、もしくは相手への否定的評価を述べるということであり、それによって相手の嫌われたくない、好かれないという積極的フェイスを脅かす。

この場合、相手がアルバイトを辞めることで話者に迷惑がかかるということは明らかであり、それに対してははっきりと「迷惑がかかる」と言うことは、配慮表現の原理、自己の負担が小さいと述べよ、に反する言語行動である。しかし、「とか」を用いることで、そのぼかし用法を利用して「迷惑」という言葉をはっきり提示しないという態度を示している。従って、この「とか」は配慮表現の原理、自己の負担が小さいと述べよ、に沿った表現であると言える。

(9)～(14) で、いくつかの発話機能 ((9)～(11) は依頼、(12) は説得、(13) は情報の補充を要求する発話、(14) は不満表明) で使用されるばかりの言い方の「とか」を見てきたが、その特徴として、「Xとか」がY、Zを含意するのではない場合に対人的コミュニケーション機能

が強く表れると言える。さらに、(9)～(13)のように相手に意思決定権があるような言語行動では、配慮表現の原理の一つ、話し手の意志をなるべくあらわにしない、に沿った表現で配慮表現として働くと言える。

2. 強調用法（評価態度を示す言い方）で使用される「とか」を含む用例から

以下は、強調用法（評価態度を示す言い方）で使われている「とか」を含む用例である。(15)は謝罪、(16)は皮肉、からかいを表す発話である。

(15) 'ごめんね（うん）、何かちょっと（うん）嘘とか付かせくちゃって>{<}。

(BTSJコーパス会話269)

(15)は謝罪の発話である。謝罪は、相手に自らがもたらした不利益によって生じた相手への「借り状態」を少しでも軽減したり、相手にもたらした不利益によって相手が向けるであろう憎悪や嫌悪感などの否定的感情を少しでも挽回するために行われる行為である。

ここでの「とか」は、「こともあろうに嘘を」「嘘をつかせるなどという大変悪いことを」というように、言語化されていない集合、つまり、「嘘をつかせること」をはじめとする「悪いこと」を想起させ、それに対するきわ立ったマイナスの評価の側面を示している。なぜこのように判断できるかと言うと、「とか」と併せて、後悔や自責の念を表す意味を持つ「つかせくちゃって」という表現を使うことで「嘘」を悪のものとして捉え、「嘘をつかせるなどという、望ましくないことをさせてしまっている自分」を自覚していることを示しているからである。これは「嘘」に対する話者の評価態度を表していると判断できる。これは、ポライトネスの原理、「自己への非難を最大限にせよ」、という行動の原理に沿った言語表現であり、相手の領域を侵して嫌われたくない、好かれたいという、自己の積極的フェイスを守るために行われる言語表現である。この「非難」についての配慮表現の原理は、山岡・牧原・小野（2010）では言語行動の種類によって原理が複雑に変わってくるため原理を立てていないとされているものの一つであり、本研究で新たに「自己に対する非難を述べよ」という配慮表現の原理を立てることとする。また、それと同時に、「嘘をつかせるなんてとても悪いことをさせている」と相手に負担をかけていることを述べており、配慮表現の原理、「他者の負担が大きいと述べよ」を満たしている。

(16) (昼食にライスLサイズを食べたと言う友人に対して)

'てか、食べ、L とかすごいね。(BTSJコーパス会話4)

(16)の「すごいね」という表現だけを見ると相手に対する賞賛を表しており、行動に関する原理であるポライトネスの原理、他者への賞賛を最大限にせよ、を満たす言語行動である。しかし、この発話は、前の文脈で、自分はLサイズのライスを残しており、そんなにたくさん食べられないということを話し、その後に、相手がLサイズのライスを平らげてしまっているのを見て

行ったものである。そのことから、「すごいね」と述べているが、賞賛しているわけではなく、「とか」によって「普通の人はLサイズのライスなんて食べないのに」という含みを示し、皮肉やかからかいを表していると解釈でき、賞賛とは反対の行為、非難ということになる。しかし、直接的に「普通の人はLサイズのライスなんて食べないのに、あなたは普通じゃない」と言うことを避け、遠まわしに相手に対する否定的評価を伝えており、配慮表現の原理の一つ、話し手の意志をなるべくあらわにしない、に沿った言語行動であり、また、行動に関する原理であるポライトネスの原理、他者への非難を最小限にせよ、に沿った言語行動であると言える。この「非難」に関する配慮表現の原理は、山岡・牧原・小野（2010）では言語行動の種類によって原理が複雑に変わってくるため原理を立てていないとされているものの一つであり、本研究で新たに「他者に対する非難をなるべく表さないようにせよ」という配慮表現の原理を立てることとする。皮肉、からかいにおいても、謝罪と同様、「とか」のみで生まれる配慮表現の機能ではなく、発話全体でその機能を果たしている。

以上から、強調用法（評価態度を示す言い方）の「とか」は、「とか」を使用するだけでは配慮表現としては働かず、「とか」と併せて使われる表現によって、発話全体で配慮表現として働いているということが言える。

V. まとめと今後の課題

以上、ばかし用法、強調用法（評価態度を示す言い方）の「とか」について、その文法的意味を解釈しそれを配慮表現の枠組みに照らし合わせることで、それぞれどのようにして対人的コミュニケーション機能を果たしているのか、そのメカニズムを考察した。その結果、「とか」の用法によって、その配慮表現としての働き方が異なることが分かった。以下に、それぞれの用法の「とか」が満たす配慮表現の原理をまとめる。

表3 各用法の「とか」が満たす配慮表現の原理

	ばかし	強調（評価態度を示す言い方）	
	相手に意思決定権がある言語行動において	謝罪において	皮肉、からかいにおいて
配慮表現の原理： 話し手の意志をなるべくあらわにしない	○	×	○ (発話全体で)
配慮表現の原理： 他者の負担が大きいと述べよ	×	○ (発話全体で)	×
本研究で新たに立てた配慮表現の原理： 自己に対する非難を述べよ	×	○ (発話全体で)	×
本研究で新たに立てた配慮表現の原理： 他者に対する非難をなるべく表さないようにせよ	×	×	○ (発話全体で)

ぼかし用法の「とか」は、「Xとか」がY、Zを含意するのではない場合に対人的コミュニケーション機能が強く表れる。そして、依頼、説得、情報の補充を要求する発話などの相手に意思決定権がある発話行為において、「意志」に関する原理が働き、話し手自身の意志をできるだけ表出しないようにすることを表す。それに対して、強調用法(評価態度を示す言い方)の「とか」は、「とか」を使用するだけでは配慮表現としては働かず、「とか」と併せて使われる表現によって、発話全体で配慮表現として働いている。「とか」だけを見ると、その機能は「とか」で取り上げられた事柄に対する話者の評価態度を表すのみであり、その評価態度を相手にどう伝えるかという対人的コミュニケーションの機能は持っていない。このことから、強調用法(評価態度を示す言い方)の「とか」は、ぼかし用法の「とか」が「とか」だけで対人的コミュニケーション機能を果たしており、対人的表現と言えるのに対して、対事態的表現であると言える。また、言語行動によって、それぞれが満たす配慮表現の原理が異なる。謝罪においては「負担」に関する原理と「非難」に関する原理が働いており、また、皮肉、からかいでは、「意志」に関する原理と「非難」に関する原理が働いている。ここでの「非難」は他者に対するものであり、先に述べた謝罪の「非難」とは、対象が自己か他者かという点で異なる。

今回、配慮表現の観点から「とか」を分析することにより、これまで、何をどのように「ぼかす」のか、その定義はあいまいであった「ぼかし」について、より客観的に示すことができた。また、これまでほとんど述べられていなかった、強調用法(評価態度を示す言い方)の「とか」の対人的コミュニケーション機能についても明らかにすることができたという点で成果があった。特に、「謝罪」と「皮肉、からかい」という限定的な言語行動においては、強調用法(評価態度を示す言い方)の「とか」は「非難」に関する原理が働いており、これは、山岡・牧原・小野(2010)の配慮表現の原理では、言語行動によって原理が複雑に変わってくるため原理を立てていないとされている、Leech(1983)のポライトネスの原理の是認の原則と謙遜の原則に関するものであり、新たな配慮表現の原理について言及できたのは本研究の成果と言える。しかし、「とか」のぼかし用法と強調用法(評価態度を示す言い方)は比較的新しい用法であり、特に強調用法(評価態度を示す言い方)はまだ十分に定着した用法ではないと思われる。今回、分析したデータが少ないのもそのためと思われ、さらに「とか」が現れた言語行動も依頼、説得、謝罪など、限られたものであり、結果を一般化するには不十分である。今後はデータ量をさらに増やし、今回得られた結果を補強していきたい。

参考文献

- 天野みどり 2001「若者ことば 銅メダルとかとった」『東西南北』2001, 100-107頁。
 神尾昭雄 1990『情報のなわ張り理論：言語の機能的分析』大修館書店。
 砂川千穂 2000「日本語における「とか」の文法化について：並立助詞から引用マーカーへ」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』6, 73-61頁。

- 寺村秀夫 1991『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版。
- 姫野伴子 2004「配慮表現から見た日本語⑫日本語教育と配慮表現」『日本語』第17巻3号, 76-79頁。
- 洞澤伸・奥村佳奈 2015「若者言葉「～とか」の強調用法について」『岐阜大学地域科学部研究報告』第37号, 1-17頁。
- 守屋三千代 2003「配慮表現から見た日本語⑫意志をあらわにしない・させない」『日本語』第16巻10号, 66-69頁。
- 森山卓郎 1995「並列述語構文考－「たり」「とか」「か」「なり」の意味・用法をめぐる－」仁田義雄『複文の研究（上）』くろしお出版, 127-148頁。
- 山岡政紀 2008『発話機能論』くろしお出版。
- 2015「慣習化されたポライトネスとしての配慮表現の定義」『第17回大会発表論文集』第10号, 315-318頁。
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 2010『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』明治書院。
- 大和啓子 2010「「とか」による例示について」『筑波大学応用言語学研究』17号, 17-27頁。
- 劉曉傑 2011「ぼかし表現「とか」についての考察」『相愛大学人文科学研究研究所研究年報』第5号, 48-35頁。
- Brown, P. and Levinson, S. 1987 *Politeness: Some universals in Language Usage*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Leech, G. 1983 *Principles of Pragmatics*, Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳 1987『語用論』紀伊國屋書店。)
- コーパス
- 宇佐美まゆみ監修 2011「BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年版」